

せられ更新されねばならないかと思はれる。だからと云つて本書が舊い時代の外交研究書として一顧過去のものであると云はんとするのではない。否それどころか今後建設するべき新しい外交史は實に本書に見られる如き外交文書に對する積實的訓練と、辛抱強き沈潜があつてこそ始めて大成されることを強調したのである。それにしても第一次世界大戰が總ゆる現代的歴史現象の出発點であることを思ふ時、現代の解明には時間的近接以上の重要性が認められる。今や何にもまして本格的な研究が求められる時、序文にも述べてみられる通り、若くして漸かれた學者が惜まれてならない。

(三省堂發行 定價七圓三十錢) (豐田堯)

太平洋に於ける民族文化の交流 清野謙次著

こ、數年來次々と著述を上梓して倦むことを知らぬ著者の最新著である。その題名からして所謂民族學的或は人類學的な内容を想像すると少し見當が狂ふ。これは著者が年來抱懷する日本考古學、人類學史の一端をあらはしたものだから、視野は頗る廣大、論題も多岐にわたり、その多彩變化の題材と着想に對して讀者は應接に遑なからしめられる。第一部民族移動と文化交流、第二部探検及び異國研究、第三部漂流記に關する研究、いづれも著者獨自の着眼と處理によつて吾人の想到を許さぬものが資料となり、相依つて以て著者の雄大な構想の見取圖を想像させる。

第一部に於ける民族移動路と大東亞戰、アメリカ原住民とアジ

アとの關係、環太平洋文化としての離頭有紐利器など、卷中どの篇としてさうでないものはないが、殊に筆々と筆を運ばれてある。著者を措いて他に人を求め得ぬ好解説の感を深くする。第二部の諸篇木村兼霞堂、刊本蝦夷探検記その他の旅行記に關する研究はいづれもこれを適當の解釋記述ではなしに人類學研究の一資料として極めて鋭利な觀察をほどこされる。これで此等の陳腐な論題も全く生氣を取戻すことになる。殊に兼霞堂に對する評傳はこの著者ならではと思はしめるものがある、思ふに著者も亦自ら兼霞堂の理解者として唯一人を以て擬してをられるのであらう。第三篇漂流記の研究、之も第二篇と同様すつかり新しい觀察法で以てこれを人類學の資料としおはせてゐる。

全卷を通じて感ぜられることは、これは或意味に於て文學的領野に自然科學的手法の銳利さを發揮したものだといふことである。縱横無盡に論題を捉へては筆龍中のものであるその潤澤雄大な學風は一陣の清風を起す趣がある。一讀の機を得たるを喜ぶ所以である。

(昭和十九年四月、創元社刊、五四十二錢) (野間三郎)

新修支那省別全誌第七卷甘肅省寧夏省

支那省別全誌刊行會編

東亞同文會は茲に大正五年から同九年に互つて支那省別全誌十八卷を刊行した。これは東亞同文書院學生の支那内地旅行による實地調査を主として編纂せられたものであつた。爾來二十有餘年